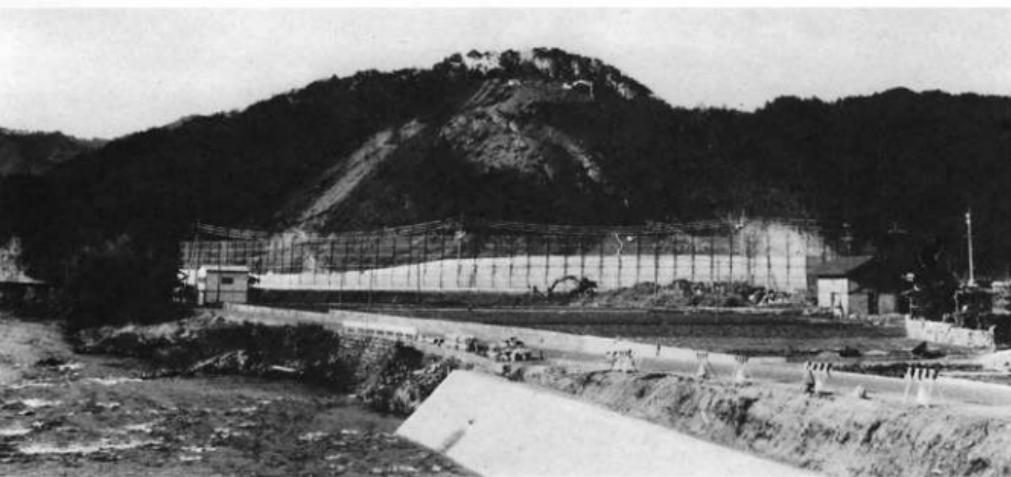


赤城跡発掘調査概報

(山県郡大朝町新庄所在)

—国道261号線・道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査—



赤城跡遠景（東より）

1982. 3

広島県教育委員会
財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

I. はじめに

昭和57年3月10日、広島県教育委員会は、大朝町教育委員会から町内の道路工事現場で石棺が発見された旨通報をうけた。これに基づき県教委は、3月12日に現地調査を行ったところ、これは国道261号線改良工事に伴う法面掘削によるものであり、現地は周知の遺跡として保存の対象とした赤城跡であった。

国道261号線改修に係る遺跡については、昭和51年10月に加計土木事務所と県教委との間で、その取り扱いについて協議し、これに係る2遺跡のうち、千代田町の河原山2号遺跡は昭和54年4月に、大朝町の寺京寺遺跡は昭和56年10月に、それぞれ事前の発掘調査を実施している。今回発見された石棺は、周知の遺跡である赤城跡内であり、当初は工事計画地内に含まれないことになっていたものが、地質調査の結果、地盤が軟弱であることが明らかとなって、急速追加工事区域となったものであり、周知の遺跡に対する事業者の安易な態度が改めて問題となつた。しかし、施工中の土木工事を中断することは勿論、地元の道路建設にかけた期待を裏切ることはできないことから、県教委としては、(財)広島県埋蔵文化財調査センターに調査を委託して、記録保存の調査を実施することになった。

発掘ならびに報告書の作成は、(財)広島県埋蔵文化財調査センター調査研究員青山透が担当して行った。



第1図 赤城跡周辺遺跡分布図 (1:50000)

1. 赤城跡
2. 間の段遺跡
3. 地京寺遺跡
4. 桜森ノ森遺跡
5. 横路遺跡
6. 島帽子岩遺跡
7. 八栄神社蕪子丸遺跡
8. 大仙遺跡
9. 河原山遺跡
10. 平家ヶ丸城跡
11. 小倉山城跡
12. 小坂可城跡
13. 小宍城跡
14. 茶臼山城跡
15. 四十九城跡
16. 日野山城跡
17. 高丸城跡(塚火台か)【弥生時代後半期の遺跡と城跡を示した。】

II. 調査の概要

当該地は、大朝町新庄字宮ノ庄小字赤城にあたり、その名の示すとおり中世山城として知られる。標高410mの急峻な山頂に位置し、間近に島根県境を臨み、平野部からの比高差は100m以上である。また、北方に小倉山城跡、南方に日野山城跡を遠望でき、両城のはば中間地点に存在する。眼下には可愛川が南流し、新庄平野一帯を眺望する良好な位置を占める。

当城跡は、過去の表面観察によると北方に向って三段の郭が廻り、西側最高所には土壘が構築され、南側は堀切りで尾根の分断を図るコンパクトに纏まった山城であることが解かる。

調査区は、前述のとおり重機による掘削が著しく崖状を呈する断面に、石棺2基が半壊の状態で露呈し、郭と思われる北側平坦部は、既に大部分掘削を受けている状態であった。

調査は諸条件の絡みにより石棺の調査から開始し、山城築城の際、それ以前の造構は削平されている可能性もあったが、遺存する郭の部分にトレーナーを設定した。この結果、調査区南端部に土壘一基、中央部東側斜面で段状造構と土壘三基を、西部平坦部で溝状造構と柱穴、城跡に伴う土壘の段、郭の段落を検出した。

造構は浅い箇所で表土下20cmで検出し、土層は丘陵斜面部に向って厚く堆積する状況である。

なお、本跡周辺は近年開発が増加し、¹⁾地宗寺遺跡(旧石器・弥生時代中期末)、²⁾横路遺跡(弥生時代前期・後期、古墳時代初頭)の造構が確認され重要な資料が蓄積されている。また、本跡周辺の地理、歴史的環境については上記報告書に詳しいので参照されたい。

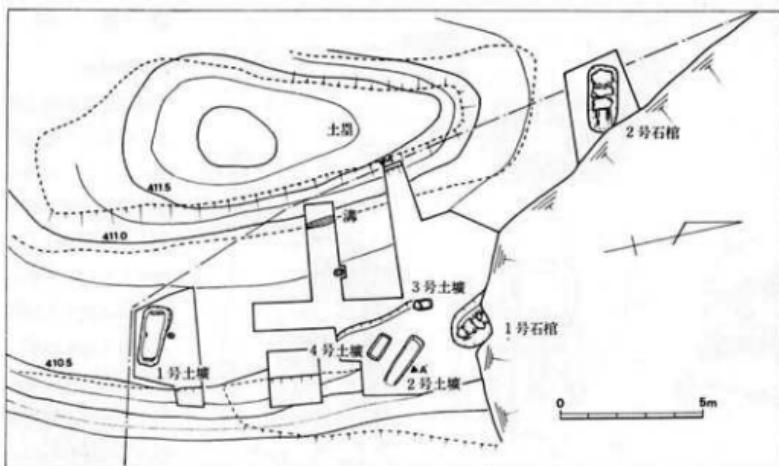
注1) 徳島県埋蔵文化財調査センター『地宗寺遺跡発掘調査報告』1982

2) 横路遺跡発掘調査団『横路遺跡』1982

※ 大朝町史編纂委員会『大朝町史』上巻 1978



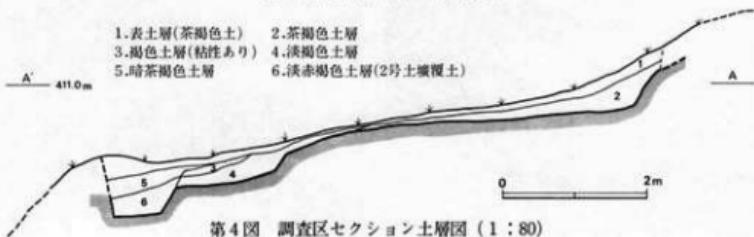
第2図 赤城跡周辺地形図 (1:5000)



第3図 遺構配置図 (1:200)



調査区近景 (西より)

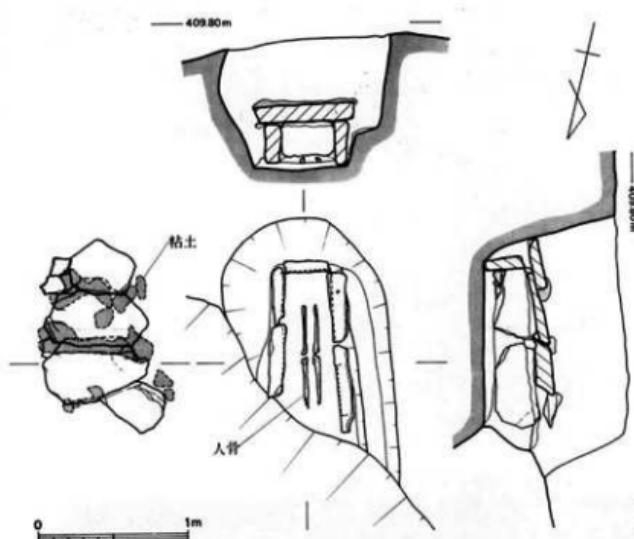


第4図 調査区セクション土層図 (1:80)

III. 遺構

1号石棺

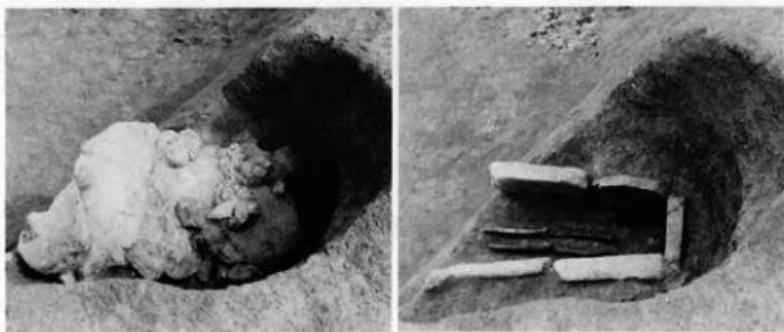
調査区北崖面に露呈したもので半壊状態であった。石棺の墓壙は隅丸長方形を呈し、推定長は2mを超えるものと思われ、城郭地山平坦部より切り込まれている。西側辺は二重に掘り込まれ、幅20cmのテラス部をもつ。蓋石は三枚遺存し、各石の間隙には淡青白色の粘土を多量に



第5図 1号石棺実測図 (1:40)

使用し、目地としている。また、蓋石は北方より横架され、各石は重複し、より密封性を高めている。側石は四枚遺存し、やや不整形な板石で上端部の高さのみ意識して構築されている。特に、南端部の側石下端部は地山に含まれる軟礫を削り出し、側石を据えている。棺内法は、幅31~40cmで頭部(北)に向って開く形態をとる。棺内には人骨一体分が遺存した模様であるが、原位置を保つものは下肢骨以下であり、最も遺存のよい左脛骨は、長さ31.0cm、断面2~3cmを測り成人葬であることが解かる。詳しくは分析の機会を待ちたい。

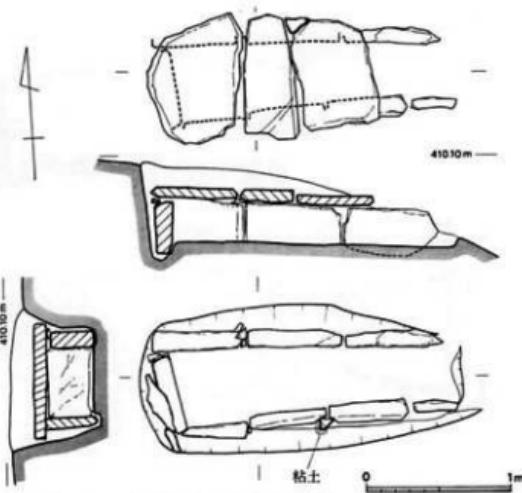
なお、朱・赤色顔料等の塗布は認められず、遺物も出土していない。



1号石棺（西より）左、人骨出土状態（右）

2号石棺

調査区西端部に位置し、現状では蓋石二石と小口石が一石除去されていたが、ほぼ全様の解かるものである。墓壙は隅丸長方形を呈し、地表下20cmで検出される。蓋石は比較的薄いものを用い、石の間隙には若干の粘土塊が認められ、側石とのレベル調整を図る小礫が看取される。側石は北側三枚、南側四枚、小口石各一枚で構成され、南側と西側の石の下端部は、壙底面壁際を幅15cm程度L字状に掘り込んだ溝部に埋め込まれている。側石の大きさは、ほぼ大きさの揃ったもので60×40cm大のものを横積し、棺内法は幅40~54cmで頭部(西)に聞く形態をとる。なお、朱・赤色顔料の塗布は認められず、遺物も出土していない。

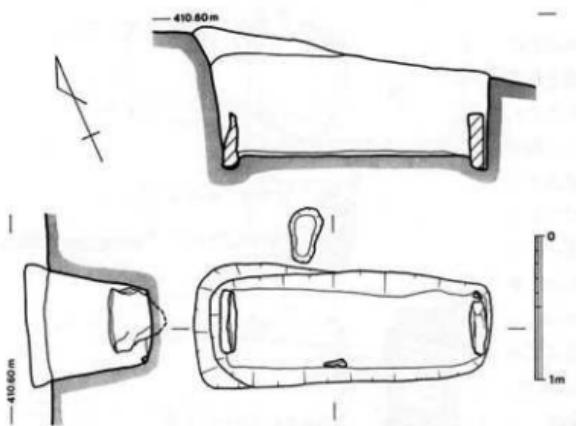


第6図 2号石棺実測図 (1 : 40)



2号石棺 (東より)左、(西より)右





第7図 1号土壤実測図 (1:40)

1号土壤

調査区の南端部に位置し表土下40cmで検出した土壤である。墓壙は西部が若干広がり、隅丸長方形を呈する。壁面小口部は、ほぼ垂直に掘り込まれ、壙底面に幅15cm、深さ15cm程度の溝が掘り込まれ、各々ほぼ逆三角形の板石を立て据え、二石の上端部の高さは、ほぼ同一である。おそらく木棺を埋納したものと考えられ、西側辺中央部に棺台に

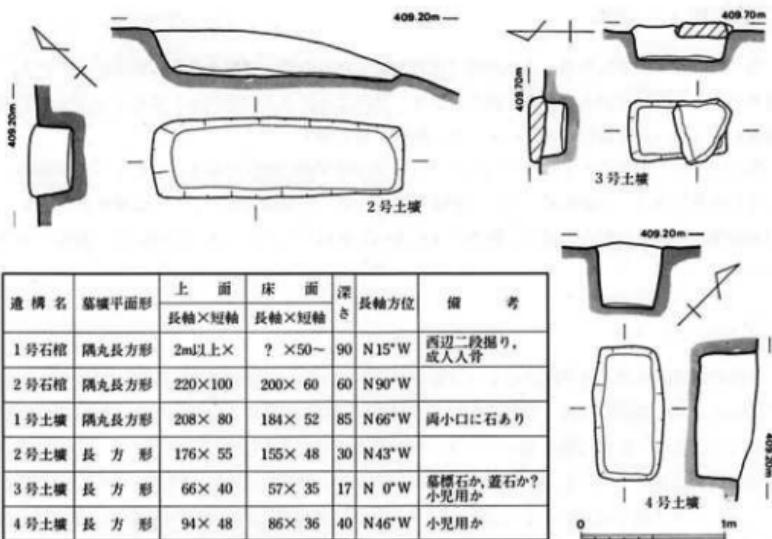
使用されたかと思われる小碟が、底面に接して検出しているが、セクション観察による墓壙覆土は、淡褐色砂質土で木棺の痕跡等は認めるることはできなかった。また、墓壙の小口西部が東部より若干広い形態を示し、頭位は西方向で、成人葬と考えられる。

墓壙東側に浅いピット状の遺構が検出されたが、城の時期に伴うものであろうか。

なお、規模および2~4号土壤については、一覧表を参照されたい。



1号土壙 (北より)

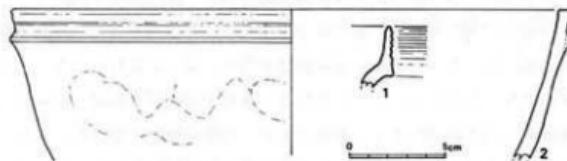


石棺・土壙計測一覧表（単位cm）

第8図 2~4号土壙実測図(1:40)



2~4号土壙（西より）



第9図 出土遺物実測図 (1:3)

IV. 遺 物

第9図-1は、調査区中央の溝状造構付近で出土したもので、変形土器の口縁部小片である。頸部からほぼ垂直に立ち上がる口縁の外面は、櫛状工具による凹線がよく認められ、6~7条看取される。内面は風化が著しいが、ナデ調整と思われる。

第9図-2は、南端部のトレンチ内出土のもので土師質鍋の破片である。斜め上方に直線的にのびる体部外面は、指頭調整、指ナデ調整が認められ、口縁部に向ってナデ調整されている。口縁端部は平坦に整形し、直下に断面三角形の凸帯を貼り付けている。内面はナデ調整で平滑である。

V. おわりに

今回の調査の結果、赤城構築以前の墳墓群を確認できた。この墳墓群は石棺、土壙で構成され、頭位方向の規則性はある程度窺われ、重複関係のないものである。工事中に発見された結果もあり、また、全面発掘に及んでいないためその数は確定的ではないが、おそらく北方に延びる地点に広がっていたものと思われる。また、2号土壙付近の段状造構は、これら土壙造営のためのテラス面と考えられる。西部トレンチ内の溝状造構は赤城土壙の下端部にあたり、河原石の集石が認められ、土壙の土止めとも考えられるが、付近より第9図-1の土器が出土している。この土器は、弥生時代後半の時期を当てることが可能であり、ピットとの関連から考え合せると住居跡の可能性もある。

墳墓群より直接に伴出遺物がないため、時期決定に困難を伴うが、大旨、弥生時代終末期を当てることが可能であろうか。山間地域の当該期のこのような墓制のあり方は、被葬者間の差は認められず、血縁的紐帶を媒介とした小集団によって形成されたものであり、次期古墳時代の墓制のあり方と関連して貴重な資料を付加した。

赤城跡に直接伴う遺構は、土壙と郭の落ち込みラインを確認したに留まった。土壙は丘陵頂部の自然地形を残し、東側を地山まで削り出したものであり、東側の郭はその整地層であることが窺われた。第9図-2の土師質の鍋は、赤城跡の機能した時期の遺物と考えられ、室町時代後半を当てることが可能であろう。

赤城跡の歴史について記録はないが、当地域に進出、支配した吉川氏の居城、日野山城跡の出城と考えられている。日野山城は、天文19年吉川春元が小倉山城より入城して以来、吉川広家が天正19年に居城を出雲国富田城に移すまで、本拠として使用されている。赤城跡の西側の谷部には、中山方面(南)より新庄盆地に入る旧道が通り、里伝によれば当城で烽火を上げていたと言われ、その名称が付けられたと考えられる。遺存する遺構も西側と南側の防備に重点がおかれて、新庄盆地の入口を直接おさえる要地であり、日野山城の出城はむろんながら、小倉山城の出城としての機能の時期も考えたい。(この項目は久枝秀夫氏によるところが大きい。)

本調査を実施するにあたって次の方々にお世話になりました。

広島県加計土木事務所・大朝町教育委員会・伊藤組・地元有志・
久枝秀夫氏(大朝町文化財保護委員)・小田正明氏(大朝町文化財
保護委員・新庄高等学校教諭)

昭和57年3月

赤城跡発掘調査概報

編集・発行

広島県教育委員会
(助)広島県埋蔵文化財調査センター

印 刷

株式会社 中本本店 印刷